

ウードコンサートと講演会 レバノンから遠く離れて

レバノン内戦をテーマにした映像・音楽作品 Goodbye Schlöndorff の制作者であるレバノン人アーティスト、ワエル・クデ氏の講演と、アラブ伝統楽器ウードのコンサートを開催します。ドイツ人反戦映画監督シュレンドルフ氏が内戦下で撮影した作品に音を重ねた作品のダイジェスト版講演を世界報道写真展の開催にあわせ、離散した家族、中東という土地に生きる人々の声を、この作品の演奏者であるウード奏者のヤン・ピタール氏が音で、平和とは何なのかと問いかけます。(逐次通訳付)



ヤン・ピタール氏(ウード演奏)



ワエル・クデ氏(演奏者)

京都～衣笠キャンパス～

日時：2015年10月4日(日)14:00～15:30

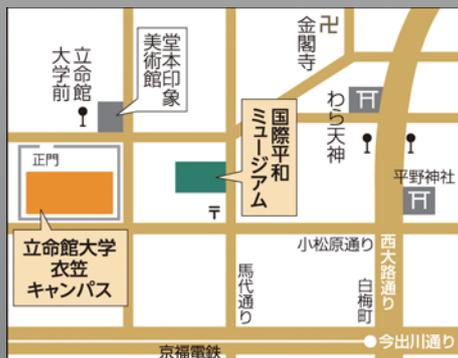
場所：立命大学衣笠キャンパス 国際平和ミュージアム 1階ロビー

滋賀～びわこ・くさつキャンパス～

日時：2015年10月6日(火)12:00～13:30

場所：立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポック立命21 ホールロビー

入場料：無料(世界報道写真展を参観される方は入場料金が必要です)



京都 衣笠キャンパス



滋賀 びわこ・くさつキャンパス

お問い合わせ先

Tel:075-465-8151

Fax:075-465-7899

<http://www.ritsumeai.ac.jp>



立命館大学
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

Good Bye Schlöndorff

—レバノンから、偽造された戦争・音の往復書簡—
カセットテープに吹き込んだ家族の安否。

1975年 - 1990年まで続いたレバノン内戦下、人々は離散した。
家族の安否、メッセージをテープに吹き込み、旅立つものに託していた。
ワエルの家族も同様に、カセットテープでの伝達を唯一のものとし、今、彼の
手元に残るテープを当時の状況を語る貴重な資料とし、Volker Schlöndorff
フォルカー・シュレンドルフ(ドイツ映画監督)のメイキング映像、音楽を合
体させた作品にした。欧米各国にて話題を呼び、現在もこの作品の公演が続
行されている。

「Good Bye Schlöndorff」本公演を以下の通り行います。

日時：10月5日(月) 18:30～

場所：衣笠キャンパス 充光館地下上映室 321

主催：院生プロジェクト「映画を通じて問いなおす『記憶』の形成」

ウード

Oud: アラブ圏発祥の撥弦楽器の祖。西方ではリュート、ギターに、東方で琵琶になる。半卵形状の共鳴胴を持ち、アラブ音楽のひとつの特徴である微分音を奏するためフレットはない。アラビア語では「木」の意味。主に伝統的アラブ音楽の主要楽器として使われる。

ワエル・クデ Wael Koudaih (作曲家・演奏者)

1979年レバノンに生まれる。祖母はガリラヤを追われたパレスチナ人。
内戦勃発後フランスに亡命。レバノン国立芸術学院修士課程修了後、
パリ第七大学、国立装飾美術大学研究員としてデジタルメディアの研究を行
なう。1997年レバノンのHipHopグループ aks'ser を立ち上げ、アラブ語圏・
欧州を中心に400以上のパフォーマンスを行なう。BBC London 制作エミー
賞デジタル映像賞受賞した作品 Shankaboot の音楽を制作。国連からの依頼
を受け武器輸送禁止キャンペーンの音楽制作。平和を望むレバノン若年層の
スポークスマンである。

ヤン・ピタール Yann Pittard (ウード奏者)

1983年生まれ。17歳でバカロレア取得後、ベンガル人 Nimai Chand Baul
からドタラを習得。エジプトにてウードを習得。パリ市音楽院編曲、オーケ
ストラ、ジャズ科卒業。シリア人フルート奏者ナイサム・ジャラルと Noun
Yaを結成、2010年シリア公演。ドキュメンタリー映画音楽制作を中心に活動。
2012年来日の際、当ミュージアムにて演奏会開催。